

地論師という呼称について

吉 津 宜 英

一はじめに

二慧遠の教判論

a 五時判などへの批判と二蔵義

b 四宗判への批評と二諦義

三智顗と地論師

a 慧遠の著作の引用

b 別教有門

四吉藏と地論師

a 慧遠の著作の引用

b 旧地論師と晩撰論師

五慧均と地論師

a 慧遠の著作の引用

b 地撰兩論成毘二家

六『統高僧伝』における諸問題

a 地論研究者と地論師

地論師という呼称について（吉津）

b 南北一道
c 十地衆主

七 む す び

一はじめに

凝然（一二四〇—一三三一）が中国仏教に十三宗ありと述べてからこのかた、我々は常識的に宗派としての地論宗、あるいは学派としての地論宗があり、その宗派なり、学派なりに所属する人々を地論師と呼んでいる。先学の著作のなかにも撰論宗とか三論宗と並列的に地論宗という一章が立てられ、地論宗なり地論学派が存在したことが既定事実として認められており、中国仏教史の概説書を見ると菩提流支三蔵などによつて訳出された『十地經論』を所依として地論宗が起り、のちに真諦三蔵によつてもたらされた撰論学に圧倒され、唐

代になると地論撰論は法相唯識宗や華嚴宗の中に発展的解消をとげたとされる。⁽³⁾

一般に地論宗南道派の人とされる淨影寺慧遠（五三一五九二）の著作、たとえば『大乘義章』や『十地論義記』を見ても彼が自己の教学は地論宗であり、自分は地論師であると述べた所はない。道宣の『続高僧伝』慧遠伝を見ても彼が地論宗南道派の地論師であつたとは記されておらず、また他の地論研究者についても、地論宗とか地論師とかの言葉は見出されない。

しかし慧遠と同時代の後輩である、智顕（五三八—五九七）吉藏（五四九—六二三）慧均（？）などの著作を見ると地論師という呼称がさかんに用いられ、その教学が处处で批判されている。この事実はあたかも彼らの時代に具体的に地論師といわれる人々が存在したように思わしめるのである。そして、吉藏や智顕の著作の中では地論師とか撰論師とかの呼称を多く用いていることと、『続高僧伝』の中で、地論師とか撰論師とかの呼称はないとしても、『十地經論』や『撰大乘論』の研究者や注釈者が輩出する事実とが結びついて、我々に地論学派なり撰論学派なりが実在したと想定せしめるのである。すなわち地論師という呼称は智顕や吉藏や慧均の教學の内において問題なのであって、歴史上の実在ではない。そ

の点では地論師という呼称は虚像である。しかしそのことは地論研究者である慧光道寵法上道憑慧遠などの人々の教學と智顕吉藏慧均などの人々の教學との関係がないということを意味するものではない。

本論ではまず一般に地論学の人とされる慧遠の著作に地論師とか地論一家とか地論研究の師資相承の意識がないことを述べ、五時判四宗判の批評を見て慧遠の立場を明らかにする。次に、慧遠を地論師の一人として見ていたかどうかは別にして、智顕吉藏慧均三人の著作の中で明確に慧遠の著作を引用批判している所を指摘し、さらに三人それぞれが地論師という呼称を多用する意図を考察したい。最後に『続高僧伝』の中に多くの地論研究者が存在する意味を考え、あわせて南北二道と五衆主の一つである十地衆主の問題にもふれたい。

二 慧遠の教判論

a 五時判などへの批判と二藏義

『大乘義章』『教迹義』で、第一に劉虬の五時判⁽⁵⁾、第二に誕公の頓漸二教判⁽⁶⁾、第三に菩提流支の一音教⁽⁷⁾の三つの教判を出し、批評を加える。批評は第一に頓漸の二門だけでは四阿含經や五部戒律などを収めることができず、第二に五時判では仏陀の一生に一切の經典をあてはめて人天教・三乘教・空教

・法華・涅槃の五教が説かれ、内容もその順序で深まるとい

うが、まず仏陀がその順序で説いたという文証がないし、人天教であるとされる『提謂経』の中にも出世の正道が説かれ、空教である『大品般若経』にも破三帰一や仏性の説はあるのだから五時の順序に内容が深くなるということは理に応じないという。次に慧遠自身の説を示す。仏陀の教に種々あるが、大きく分けると世間と出世間になり、出世間の中を声聞藏と菩薩藏に分ける。次に經典の内容についても種々あるが、所説である行徳と所表の理法との二方面から見ることができ、所表の理法は彰すことがむつかしいので行徳に寄せて顧にするから所説の差異が生ずるとする。

この「教迹義」からわかるように、劉虬などの五時判は結

局『涅槃経』を最高のものとして位置づける意図を持つていたのに対し、慧遠の二藏説は一經一論を主張する教判ではなく、たとえそれが大乗菩薩藏の立場を明らかにする意図があつたとしても、『涅槃経』とか『十地經論』とかの經論の形式よりも、その内容を決択していく教判であつた。このような教判論から一經一論を所依とするような立場は出てこないことは明らかである。

立性宗（因縁宗）・二破性宗（仮名宗）・三破相宗（不真宗）・四顯実宗（真宗）の四宗であるが、慧遠は第四真宗の所を明確にしようとしてはいるが、彼の立場が第四の所にあるのではないし、また特定の經論を第四真宗所属のものであると主張しない。そのような考え方を批判する。

すなわち、ある人が一向に四宗はないというのに對し、慧遠は第一第二は特別に分けないでも内容的に明らかに差異がある。第三第四の両宗については『勝鬘經』に空不空二種如來藏義があり、『涅槃経』にも空不空の區別があることによつて差異は明らかであり、四宗の別がないという批判はあたらないと述べる。

次に、ある人は、四宗それぞれに經典を配当し、阿毘曇は因縁宗、成実は仮名宗、大品法華は不真宗、華嚴涅槃維摩勝鬘などは真宗だとしているが、慧遠はこれを批評して、前二宗はそれでよいが、後二宗にそのように大乗經典をあてはめ、浅深を定めてはならず、行徳である宗の表現の差異として見るべきであるとする。先の「教迹義」の所説と所表との関係で經典を見るべきだとする。これによつて、慧遠が真宗の所を明らかにしようとしたが、一經一論、たとえば『十地經論』を所依とし、その論を真宗所属のものとするような議論を開いていなることは明らかであり、このことは『十地經論義記』においても一貫した態度である。

b 四宗判への批評と二諦義

次に『大乘義章』「二諦義」で扱われる四宗判を見よう。この四宗判は一般に地論師の教判とされている。⁽⁸⁾すなわち一

以上のことから、慧遠自身が地論宗あるいは地論師として自己の教学を規定した意識はうかがわれない。ただこれは慧遠一人の場合であつて、他の地論研究者の場合については著作が断滅的にしか残っていないので不明である。しかし、『続高僧伝』によつて、代表的な地論研究者、たとえば慧光⁽⁹⁾・法上⁽¹⁰⁾・道憑⁽¹¹⁾・靈裕⁽¹²⁾などの研究講説著作の様子を見るかぎりでは、慧遠と同じような傾向であったのではないかと思う。

三 智顕と地論師

a 慧遠の著作の引用

南北朝時代は現在では統一されている広大な中国が南北に分立して拮抗した時代であり、必然的に思想文化も南北それぞれ独自の発達をとげ、両者の交流はあまり密でなかつたと思われる。梁代に慧皎によつて著わされた『高僧伝』に北魏の高僧が数少ないことも、それによるのであろう。

南北両朝の交流、それを仏教の場合に限定してみると、北周破仏および北周の北齊圧迫によつて、多数の僧侶が江南に難をのがれたこと、そして隋代になると、それらの僧侶も北方に帰ると同時に、文帝煬帝二帝の政策によつて江南の僧達も多く洛陽長安に行き、その交流は急速に進む。智顕や吉藏の著作の中に北地の教学が多く引かれるのは、主として北周武帝の破仏と北齊圧迫によつて南下した僧侶達による学問典

籍の将来によるのではないだろうか。⁽¹⁵⁾

安藤俊雄博士の『天台学』では、その随處に慧遠の教学との対比をされ、天台教学成立の一つの縁因として地論摂論の教學の重要性を指摘しておられるが、智顕が直接慧遠の著作を引用批判する点のあることを示されていない。慧遠の著作の引用が晩年心血をそそいだ著作である『維摩經文疏』に見られるので先ずそれを指摘しておきたい。

『維摩義記』

非得果者、約果以説。此言略

経言非得果、有師解言、此恐

少。準前應言、非得果非不得

脱落、類應有對。今明非脱落、

果。且舉一邊、名仏為果。不

正是義也。（続藏・影印本二

捨一切菩薩所行故非得果。實

十八・四八左上下）

証菩提故非不得。今略不弁

（大正三八・四五一下）

『維摩文疏』

凡夫非離凡夫……所言弥勒者、有師言、即是從

慧遠が「非得果」に対して「非不得果」が略されているとするのに対し、智顕はそのまま正しいと批評する。

『維摩經』「弟子品」のなかで「不見四諦非不見諦非得果非凡夫非離凡夫……」（大正十四・五四〇中）とある一文について慧遠が「非得果」に対して「非不得果」が略されているとするのに対し、智顕はそのまま正しいと批評する。

『維摩義記』

弥勒是姓、此翻名慈。字阿逸

所言弥勒者、有師言、即是從

多、此云無勝。是彼波羅捺輔

姓立名。今雖不見明文、意謂

相之子。弥勒初生、具諸相好。

非姓、恐是名也。……（中略）

『維摩文疏』

非姓、恐是名也。……（中略）

波羅捺王、名梵摩達。聞其生
已、福相過人、恐為國患、現
欲危害。遂從其父、索以瞻之。

父知王心、即答王言。外家將

去、廻至家中、尋即遣人、送
南天竺波婆離國。(大正三十
八・四六〇中)

去、廻至家中、尋即遣人、送
南天竺波婆離國。(大正三十
八・四六〇中)

『經』の「菩薩品」冒頭の弥勒菩薩の解釈をめぐって、慧遠

が「弥勒はこれ姓、字は阿逸多」としているのに対し、智顗

は経論に明文がないから、その解釈に執著してはいけないと批判している。ちなみに、この慧遠の解釈を吉藏は『維摩經義疏』(大三十八・九四九上中)でほとんどそのまま引用している。

智顗が慧遠の『大乘義章』を引用あるいは批判している所は、今のところ指摘しえないが、右の対照からもわかるように、細かい語句の解釈についても慧遠の著作を丹念に読んでいることがわかる。

有人言、阿逸多是名。既不親
見經論翻訳、亦不可定執也。
(續藏・二十八・七十四左上
下)

を多く用いているが、今は『維摩經玄疏』と『四教義』とに
よつて呼称および批判の意図をうかがいたい。

『維摩經玄疏』の三三昧を論ずる所で、第一の空三昧の項

で「生源不可得即は無始空、是名空三昧、空無住之本一切法也。若爾豈全同地論師計真如法性生一切法。豈全同攝大乘師計黎耶識生一切法也。問曰。各計何失。答曰。理無二。是二大乘論師、俱稟天親。何得諍同水火。」(大正三十八・五二八中)

と述べ、第二無相三昧の項で

「若不取四邊之定相即は無相三昧入實相也。若爾豈全同地論師用本有仏性如闇室瓶盆。亦不全同三論師破乳中酪性畢竟盡淨無所有性也。問曰。各計何失。答曰。若無失者、二大乘論師何得諍同水火也。」(五二八中)

と述べ、最後の無作三昧の項では、

「若無四修即無四依、是無作三昧也。若爾豈同相州北道明義緣修作仏、南土大小乘師亦多用緣修作仏也。亦不同相州南道明義用真修作仏。問曰。偏用何用。答曰。正道無諍、何得諍同水火」(五二八下)

と述べている。ここで智顗は地論師と撰論師、地論師と三論師、地論の南道と北道との論諍を前提にして議論を進めていくかを見よう。『摩訶止觀』『法華玄義』『法華文句』『四教義』『維摩玄疏』『維摩文疏』などの著作に地論師という呼称お互に論諍していた事実を述べたのではなくて、智顗の思弁

の中で、それらの諸師の対応が形成され、それによつてこの場合で言えば、智顕の三三昧の解釈を明確にするために活用されている。もちろんこの記述は智顕以前に地論撰論三論の

教学が存在することを前提として要求するが、それによつて直接にそれらの教学を所依とする学派なり学者の存在を論証することはできない。この種の記述を事実と混同するならば、歴史の真実を失うと同時に智顕の意図をも見失うことになる。

次に『四教義』に

「但地論師明、阿梨耶識是如來藏。即是用別教有門入道。三論人云、汝是不見真空、亦是唼水義。三論師明諸法畢竟無所有。此是別教空門。地論師云、汝是外人冥初生覺義、亦是黃蜂黃蝶義。執諍不穆、何可融會也。今謂、此是不得別教四門之意、不知四悉檀、說此有空兩門義也。」（大正四六・七三〇下）

とある。智顕の教學において、五重玄義・四悉檀・三觀・四教などは最も重要であるが、今三論地論の批判についても、別教に有空亦有亦空非有非空の四門を設け、地論を別教有門、三論を別教空門に配し、两者共に四門全体の意および四悉檀の意を得ず、空や有の一边に墮していると批判する。ちなみに摂論も別教として位置づけられており、三論師・摂論師そして地論師の批判が智顕の四教における別教の内容規定の上で大きな意味を持つていることが理解される。

四 吉藏と地論師

a 慧遠の著作の引用

智顕と吉藏とは共に南北朝から隋唐へかけての江南の仏教学を代表する。智顕は吉藏の師興皇寺法朗（五〇七—五八一）⁽¹⁸⁾さらにその師摂山止觀寺僧詮の教学を著作に引き、吉藏は『仁王般若經疏』⁽²¹⁾と『法華義疏』⁽²²⁾の中で智顕の教学を引く。吉藏は隋の煬帝の勅命によつて長安に行き、そこで研究講説著作活動を行うが、この長安での北地の種々の教学との交流は彼の思想形成において大きな意味を持つていて、吉藏は初期の著作から地論師という呼称を用いており、北地の種々の教学にも精通していた。これは先述の北周破仏による南下僧との接触もあつたであろうが、師の法朗と同門の慧布が北齊鄆都からもたらした文献によるかもしれない。ともかく、吉藏による慧遠の著作の引用は予想以上である。すなわち会稽嘉祥寺時代の『法華義疏』における『大乘義章』⁽²³⁾の引用、『大般涅槃經疏』における『大般涅槃經義記』⁽²⁴⁾の引用、燬州慧道場時代の『勝鬘寶窟』における『勝鬘義記』⁽²⁵⁾の引用、そして長安時代の著作である『維摩義疏』における『維摩義記』⁽²⁶⁾の引用などが主なものであるが、もつと細かに検討するならば他の著作においても見出されるであろう。これらの引用関係は先学によつて指摘されているが、新しい資料である『勝鬘義

記・下巻⁽²⁷⁾と『勝鬘宝窟』との引用関係の一例を示す。

『勝鬘義記』

八識之義、広如別章、此應具論、前明妄中、於此六識、及心法智、挙其妄心、六是事識、及心法智、是第七識、迷時名

心、解名法智。此七不^レ住、明

其離真、妄体不立、事六妄、

合為七法、無真此七、一念不

立、名刹那不住。(一依章、ペ

リオ・一〇九一表・十八紙)

此造疏人、不見撰論、謂第七識名法智。撰論第七識名阿陀那、此云無解識、豈得稱法智耶。今所明、六識不異旧。及心法智者、六識既是心王、智是心數法、故言心法智。小乘

人云、由六識起煩惱能種苦、

由心法智、能厭苦樂求涅槃、

何須仏性、此七法刹那不住者。

第二破。以念念不^レ住、故不能

起於染淨。(大正三十七・八

三中下)

b 旧地論師と晚撰論師

吉藏の破邪の形式は楊州時代の『三論玄義』で明らかにされている。すなわち一外道二毘曇三成実四大乘の四宗を破す。そのうち毘曇と成実とはまとめて小乗として扱われ、人と論人、あるいは數論と列挙される用例は智顗や後に見る

『勝鬘宝窟』

於此六識及心法智者、有人言、六識者、六是事識、及心法智是第七識。迷時名心、解名法

智、第八名藏識、是阿梨耶。

此造疏人、不見撰論、謂第七

識名法智。撰論第七識名阿陀

那、此云無解識、豈得稱法智

耶。今所明、六識不異旧。及

心法智者、六識既是心王、智

是心數法、故言心法智。小乘

人云、由六識起煩惱能種苦、

由心法智、能厭苦樂求涅槃、

何須仏性、此七法刹那不住者。

第二破。以念念不^レ住、故不能

起於染淨。(大正三十七・八

三中下)

慧均と同様である。⁽²⁹⁾ この数人、論人という呼称は、南朝の宋齊時代あるいは北朝の北齊時代の毘曇研究の隆盛⁽³⁰⁾、さらに梁代の成実論研究の流行⁽³¹⁾などを反映してはいるであろうが、それによつて数人とか論人とか自称した高僧が存在したことにはならないし、やはりこれらの言葉も吉藏の批判の立場からの貶称と見るべきであろう。

大乗については『三論玄義』では宋道場寺慧觀の五時教判と特別の人名をかかげないで二諦に関する邪執を破していく。吉藏は涅槃宗とか涅槃師とかの呼称を用いなければども、いわゆる江南の涅槃教学の破析が最大の目的であったことがわかる。

北地の教学については、地論師・撰論師・北土三論師・北土智度論師の四種の論師が主なものである。そのうち地論師の学説については嘉祥寺時代の著作から終始一貫して、しばしば引用批判される。先述のように『法華義疏』などに慧遠の著作を多く引用するのであるが、吉藏が慧遠を地論師と考えていたかどうか明文はない。吉藏はあれだけ多く慧遠の著作を引きながら、一回も慧遠の名前を出さない。これは梁代の三大法師の扱いと異なるところであるが、慧遠を地論師の人と見ていたとしても何ら支障はない。

北土三論師と智度論師については、長安成立の著作に引用批判がみられるが、そのなかで北土の三論師についてはある

特定の論師が予想されるとされ⁽³²⁾、北土智度論師については特定の論師を予想している場合と『智度論』の教学を擬人化して批判している場合の二面があると思う。

摂論師については、楊州慧日道場時代以前の著作にはその呼称はない。しかし吉藏による真諦三蔵所翻の經論の引用、特に『摂大乘論』の引用は多いし、また『法華玄論』では「晚見摂大乘論与一師大致符会」（大正三四・三八一上）

とあり『摂論』の教學と三論教學が大綱では符合するとのべて、いるほどであり、この吉藏の感想は彼の教學を見る上で重要である。『三論玄義』の最後に「摂大乘論師」（大正四五・十四下）として非安立説の説を引くが、これは特定の人の説ではなくて『摂論』の学説と考えられる。長安時代の第一作とされる『淨名玄論』⁽³⁴⁾（大正三十八・八五七下）では「即世所行の塵識四句」として『摂論』の「無塵唯識説」を出し、世親の真意を末學が体していながら破析するとのべ、この著作を起点として『維摩義疏』『維摩略疏』『法華論疏』『法華統略』『十二門論疏』『百論疏』『中觀論疏』そして『大乘玄論』⁽⁵⁾など著作にさかんに摂論師が破析される。『百論疏』には、三論教學にも唯識義があるといい（大四十二・一二七中）、また長安では盛んに唯識を弘めているので、それとの同異を弁じなくてはならぬとし（二三六b）、さらに大業四年（六〇八年）長安に摂論師・十地師・地持師の三種の論師がいるとし（二〇二

下）、當時長安で唯識學が興り、江南から長安に來た吉藏が彼らの教學を意識していたことがわかる。

そして地論師の教學もあいかわらず破析の対象とはなるが、旧地論師という表現が『法華統略』⁽³⁷⁾『百論疏』⁽³⁸⁾『中觀論疏』⁽³⁹⁾などに見られることに注目したい。この旧地論師といふ呼称は地論師に、新旧を見た意味での旧地論師とも考えられるが、そうではなくて、晚摂論師に対する呼称のようである。それは『中觀論疏』に

「今明實相不同。南方真諦之理。北土實相般若。亦異旧地論梨耶。
晚摂論大乘阿摩羅識。如此等並同續子計我有理存焉」（大正四〇二・一二六下）

とあることによつて理解される。この晚摂論師の呼称は、他にも『百論疏』（大正四十二・三〇三下）にも見られ、また『中觀論疏』には「即時摂論師」（一〇四下）という表現もみえる。また『法華統略』には「晚弘智度論師」（統藏・影印本四十三・六三左下）という類似の呼称もある。

この旧地論師と晚摂論師との対比は、智顗の『法華玄義』に「摂大乘明十勝相義、咸謂深極。使地論翻宗。今試以十妙比之。彼有所漏。」（大正三十三・七〇四下）

とあり、摂論によつて地論が宗を翻がえしたという記事や、『統高僧伝』曇遷伝（大正五〇・五七二下）で、長安における曇遷の『摂論』の講説を慧遠など数千人の僧侶が聽受したとい

う記事などに対応し、確かに長安における摂論研究の高まりを反映している。しかし、それだからといって、慧遠などが旧地論師であり曇遷などが晩摂論師であると早計してはならない。やはり、これらの呼称も吉藏自身の事実認識・自己主張の場において先ず把握すべきであり、そして慧遠や曇遷の活動および教学の内容を見た上で、各人相互の交流を歴史的に確かめ、さらにこれらの呼称の虚像と実像とを明確に区別しなくてはならない。

五慧均と地論師

a
慧遠の著作の引用

慧均の伝記などは不明であるが、研究によれば、吉蔵と同時代の後輩であり、あるいは両者互に熟知の間柄であつたとも言われる。⁽⁴⁾ 彼の『四論玄義』に慧遠の『大乘義章』の大幅な引用がみられるし、地論師の呼称に関して智顥や吉蔵にない用例があるので考察を加えたい。

『大乗義章』の引用は私の見たかぎりでは、「二智義」「三乘義」「莊嚴義」の三ヶ所であるが、今は「二智義」によつて示そう。

『大乘義章』「二智義」
『四論玄義』「二智義」

其二智者、一是実智、二方便智。言実智者、汎解有一。一

地論師といふ呼称について（吉津）

於諸法如實了知、名為實智、非是不知妄稱知故。

故地持云、離增上慢智名為如
實智、此如實智與彼慢心妄智
相對、不對方便、於此門中、
併一切智、悉名實智、不簡方
便。二知實法名為實智。於中
地攝兩論、引地持論云、離增
上慢智名如實智。有五義。一
對妄明實。何者、知如來藏真
實法名實智。知於妄想情所起
法名妄智。……(中略)…

地攝兩論、引地持論云、離增上慢智名如實智。有五義。一對妄明実。何者、知如來藏真實法名實智。知於妄想情所起法名妄智。⋮(中略)⋮

知如來藏、真實之法、名為實智、知於妄想情所起法名為實智、如知苦諦、名為苦智、如是一切、於此門中、實智與彼妄智相對、不對方便。（中略）方便智者汎解有四。一進趣方便、如見道前七方便等、進趣向果、與果為由、故曰方便、此一方便、與果相對、不對實智、若名果德以之為實、義亦無傷。∴（以下略）：（大正十四、八四六上中）

方便智者、汎解經論、有四種。
一通趣方便。知見道前方便等。
進趣向与不與果為由、故曰方
便、與果相對明之也。（以下
略）（統藏七十四・六九左上
下）

『大乗義章』の内容を引用するのに「地摶二論」という呼称を用いていることに注意したい。

b 地撰両論成毘二家

慧均は地論師・撰論師・成論師・数人などのようにそれぞれ単独の呼称も用いるが、彼の呼称の特色は、毘成地撰・地撰両論成毘二家・地撰与成毘四家などのように並称するところにある。

智顥に数論と並称する用例は多いし、地撰二論師⁽⁴⁴⁾・十地中撰数論等などの用例はあるが、地論師と撰論師との学説を引く時は、ほとんどの場合区別して明記している。吉藏も数論と並称するが、地論師と撰論師との学説は区別している。

したがつて地撰両論成毘二家の呼称のもとに学説を引く態度は慧均独特のものである。慧均は自己の立場を無依無得と主張し、僧詮のことを「撰嶺西霞寺無所得三論大意大師詮法師」（続藏七十四、十八左下）と呼ぶ程であるから、地論師と撰論師との教学の差異を捨象して、地撰と並称する理由は有所得の一語にあつたと言える。「如地撰両論成毘二家有所得無方便菩薩：」（八左上）「数論有得大乗家有筒有無筒：」（四十二右下）「又地撰両論学有得大乗師宗已是懸絶：」（四十七右下）などの類似の表現が多く見出されることによつて理解される。吉藏も有所得大乗といふ批判の言葉を多く用いるが、慧均のようすに地撰有所得大乗などの用例はない。吉藏の有所得大乗は、その内容が地論師であつても撰論師であつても、また南方の成論大乗師であつてもよいのであるが⁽⁴⁷⁾、地論師と撰

論師とは区別している。

この『四論玄義』の成立年代は不明であるが、顯慶三年（六五八年）という識語があるからそれ以前の成立であろうし、また玄奘三藏所伝の諸經論の影響がないことから、それ（六四年）以前とも考えられる。吉藏が地論師と撰論師とを区別し、しかも旧地論師・晚撰論師という呼称を用いるのに対比すると、慧均は両者の区別にあまり意を用いていないので、彼は両者の区別に留意する必要がなく、無所得三論の立場を挙揚した人であり、吉藏（五四九—六二三）の長安における著作活動以後に『四論玄義』は著わされたのではないかと思う。

六 『続高僧伝』における諸問題

a 地論研究者と地論師

中国仏教史研究において、初唐までの資料として慧皎の『高僧伝』や道宣の『続高僧伝』を主として用いるのであるが、それらの僧伝の記事をそのまま事実に置きかえることは危険である。僧伝にも先に見てきた智顥や吉藏の著作におけると同様、ある主張や意図がある。慧皎や道宣の意図は何か。それは護法であり、師資相承の主張であり、仏教が脈々として伝持されてきたという確信であり、永劫に相続されなくてはならぬという悲願である。したがつて『高僧伝』『続高僧

伝』はかなり意識的に師承を明確にし、弟子を明記する。それによつて、一經一論一律のいづれかに基準を定めて、法系をたどることができる。その結果が『仏教大辞典』に収録されているような「三論宗系譜」「四分律宗系譜」「地論宗系譜」

「攝論宗系譜」等々であり、私自身も「智度論師の系譜」⁽⁴⁸⁾と「アビダルマ研究者の系譜」⁽⁴⁹⁾とを作成した。

これまで見てきたように一般に地論宗南道派の僧侶とされる慧遠の著作のどこにも地論師とか地論宗とかの表現や意識が存在せず、地論師を連呼する智顥や吉藏や慧均は、自己主張と他の教学の限定という点において、その呼称がまず彼らの教學内の問題に限ぎられるのであれば、地論師の自覺を持たない慧遠をあえて地論宗系譜の中で法上の弟子として配列することは本質的に無意味である。

そのような配列は、一面道宣の意図どうりでありながら、他面かれの真意に逆う研究態度であろう。道宣は慧遠の師承をできるかぎり明確にしようとはしているが、彼の伝記中に地論宗とか地論師という言葉を使用していないことからも理解されるようすに、地論の系譜を明確にするために、あるいは地論宗の教學を挙揚した人としての慧遠を顕彰するために慧遠伝を立伝したのではなかつたからである。

確かに『続高僧伝』には多くの『十地經論』研究者がいるが、それらを地論師とか地論宗とかの呼称で総括的に扱うこと

となく、一人一人の佛教者として扱い、その活動の歴史性とその教学の眞理性が考察されるべきだという、ごくありふれた結論に導かれるのである。

b 南北二道

右の議論に対し二つの疑問が残る。その一つは『続高僧伝』卷七の道籠伝に一説として

「初勒那三藏、教示三人。房定二士授其心法、慧光一人偏教法律。菩提三藏惟教於寵。寵於道北、教牢宜四人。光在道南、教憑範十人。故使洛下有南北二途。當現兩說自斯始也。四宗五宗亦仍此起。今則闕矣。輒不繁云。」（大五〇・四八二下）

の記事があり、道宣は地論宗南道派北道派二派の対立を認めていたのではないかという疑問である。確かに学派の対立があつたと言つてはいるが、それを地論学派内の対立と見るのは、智顥や湛然の記事⁽⁵⁰⁾を安易に歴史の事実にすりかえた結果であり、そして智顥や湛然の記事に導かれた研究成果による偏見である。この『続高僧伝』の記事の背景には、『十地經論』翻訳についての菩提流支・勒那摩提さらには佛陀扇多の三人の訳經僧の間の意見の差異があるとされるが、しばらく『十地經論』をはなれて、『攝大乘論』を出した仏陀扇多、『宝性論』を訳した勒那摩提、『十卷楞伽經』などを翻じた菩提流支、等々と考えてみると、三者の間に意見の差が

あつたのは当然であるし、菩提流支についた道寵と勒那摩提に師事した慧光の間に思想の違いがあつたのも理解できる。ただ、彼らすべてを地論宗なり地論師なりの概念で一括し、その学派内の問題を考えることは誤謬であり、両者の意見の差を単に阿梨耶識の真妄の差異で把握することは偏頗である。ここで、ひとまず地論宗の南北二道という形式的見解から脱して、先の三人の三藏法師の活動と教学の内容の検討、さらに慧光道寵二師の研究が進められなくてはならない。

c 十地衆主

第二の疑点は、『続高僧伝』卷十二慧遷伝（大五〇・五二〇

中下）で彼が、隋の文帝によつて五衆の中の十地衆主に任せられてゐることである。この記事によつて、文帝時代に十地衆といわれるような学派が存在したのではないかという問題である。この十地衆主の問題については速断は不可能であるが、他の大論衆主・講論衆主・講律衆主・涅槃衆主などを考慮してみると、慧遷自身が衆主としての自覚を持つて一衆を統御するような内容のものではなく、当時流行の教学の名をかりて皇帝の方から命名された、一つの宗教制度であつたのであろう。⁽⁵¹⁾ 慧遷は慧遠の弟子であるから地論教学に精通していだのであるが、伝記によるかぎり、彼が地論のみを所依として教学を展開したと考えることは不可能である。むしろ慧

遷を含めて五衆主に勅任された高僧の師匠たちが、隋初の五大徳であつたり、北方の三大徳であつたという事實が大切である。隋初の五大徳に暈遷が加わり六大徳⁽⁵²⁾となり、文帝の庇護を受ける。やがて煬帝の時代になると内道場の制度によつて、特に江南の高僧達が六大徳の位置にとつてかわり権勢を振る⁽⁵³⁾。そのような隋代の政治の動きに応じた宗教界の流れのなかで、政治の側から要請された宗教政策の一つが五衆の制定であり、十地衆主をすぐに地論師の教団の存在と解釈することは、政治と宗教との相互関係を無視する結果になるであろう。

七 む す び

以上、地論師という呼称をめぐる諸問題を考察したが、次の三点が指摘できる。第一は、文献が残されているというところから智顥、吉藏、慧均の三人の呼称の用例を検討した結果、この呼称が彼らの批判の言葉（貶称）であつて、大乗家が小乗⁽⁵⁵⁾と言ひ、その小乗という言葉（貶称）の受け人がいないのと同様、地論師という呼称の受け人も存在しない。第二に彼らが特定の人物を特に地論師と呼称していたとしても右の原則に支障はないが、そのことと、ある特定の人（例えば慧遠）の著作を引用したり批判したりする事実は区別して扱うべきである。呼称の面はかつてに相手を限定することができるが、引

用は逆に相手に限定される側面があるからである。第三に『続高僧伝』に地論研究講説注釈の高僧達が輩出し、南北二道の記事があり、十地衆主勅任の事実があるが、それらを地論師地論宗の視点で研究してはならない。それらは地論の視野では把握できない多くの問題点を有しているからである。

1 『三国仏法伝通縁起』大日本佛教全書、巻第一〇一、九八頁一九九頁。

2 境野黄洋『支那佛教史講話』上（共立社・昭和二年・三三二九頁）「地論宗」、宇井伯寿『支那佛教史』（岩波書店・昭和十一

年・七八頁）「地論宗」、佐々木月樵『撰大乘論』（日本仏書刊行会・昭和三十四年・三六頁）「第五章地論学派と撰論学派」、ちなみに望月信亨『大乘起信論講述』（大正十一年・『金尾文淵堂』）では『起信論』の内容を地論学派と撰論学派との融和を目指すものとして解釈される。

3 宇井・前掲書、道端良秀『中国佛教史』（法藏館・昭和十四年・六五頁、七十頁）

4 平井俊栄「中國三論宗の歴史的性格（中）——嘉祥大師と撰嶺相承——」（駒沢大学仏教学部研究紀要、第二十五号・昭和四十二年・七八頁）で「彼が在來の佛教勢力に対して自派の学説の正統性を主張する有力な根拠となつてゐるものは、それが閔河旧説に基く撰嶺相承の説であるということである。」と述べられているような意味での相承の意識は懸遠には存在しない。

5 この五時七階の説は『出三蔵記集』巻九（大正五五・六八上）

に収録されている「荊州隱士劉虬作・無量義経序」によつたもの。智顥『法華玄義』巻第十上（大正三三・八〇一上）では南北双方とも頓漸不定の三種教相を用いるとし、具体的に南三北七の異説を列挙するが、劉虬の説はかかげられていない。第四説としてあげる北地師の五時教の説が劉虬説に近い。窓基『大乗法苑義林章』巻一（大正四五・二四七中）では「晋時有隱士劉虬立五時教。或有説云、真諦三藏立五時教、然菩提流支法師、別作文疏破之。真諦居梁、流支在魏。故知不是真諦等作。」という記事がある。

6 この説も『法華玄義』には紹介されていない。誕公とは誰か。『続高僧伝』巻二十六に明誕（大正五十・六六八下）と慧誕（六七一中）との二人が立伝されているが、頓漸論についてはふれていない。

7 『法華玄義』では、この一音教をかかげず、半満二教判を出す。『義林章』では一時教・頓漸二教・半満二教とともに菩提流支の説とする。法藏の『華嚴經探玄記』では十種の教判を紹介するが、その第一に菩提流支の一音教を出し、第二に真諦三蔵の漸頓二教判を出す。このように教判に關しては、諸説紛糾で收拾がつかない。また吉藏は『法華玄論』巻三（大正三四・三八二中）などで、北方の四宗判は南方の五時判の影響で出来たとし、智顥は『四教義』の中で地論人の四宗判と四教義との差異を論ずる（大正四六・七二四中）。南北朝から隋唐にかけての教判論の整理が必要と思う。

8 吉藏は『中觀論疏』巻一本（大四二・七中）で旧地論師などが四宗義を弁ずるとし、智顥は前註のごとく地論人の四宗教を批判する。『義林章』では古大徳の説として四宗を引き（大四五・二四九下）、『探玄記』では齊朝大衍法師などの説とする。この大衍とは、『続高僧伝』巻八の齊洛州沙門釈曇衍（大正五〇・四八七中）のことと思われる。

9 『続高僧伝』巻二十一慧光伝では、彼は地論・四分律・華嚴・涅槃・維摩・地持・勝鬘・遺教・溫室・仁王般若などの經律論に注釈を加え、他に玄宗論・大乘義・律義章・仁王七説・僧制十八条などの著作があった。

10 『続高僧伝』巻八法上伝では、彼は十地・地持・楞伽・涅槃などの經論を講じ、増一數法四十卷・仏性論一卷・大乘義章六卷・衆經錄一卷などの著作があった。

11 『続高僧伝』巻八道憑伝では、彼は維摩・成実・四分律・地論・涅槃・華嚴などを研究講説した。

12 『続高僧伝』巻九靈祐伝では、彼の著作は、十地・地持・維摩・般若・華嚴・涅槃・大集・四分律・勝鬘・央掘・寿・觀・仁王・毘尼母・往生論・上下生・遺教などの經律論に及び、その他に大乘義章・大小乘同異論など多くの著作があつた。以上のように、これらの四師には共通の經律論はあるが、一經一論によるというよりも、広く經律論を研究し、それらの総合統一をめざしたと考えられる。

13 『続高僧伝』巻十の靖嵩、慧最、巻十一の弁義、明舜、法侃、巻十二の慧遷などの伝記による。特に靖嵩伝には同学法貴靈侃

等三百余僧が共に江南に來たとある（大正五〇・五〇一下）。

14 山崎 宏『隋唐佛教史の研究』（法藏館・昭和四十二年）第五章煬帝（晋王広）の四道場・参照。

15 智顥の場合、師の南嶽慧思が北齊の慧文に禪法を受けたと言われるから、師を通じて北地の教學を学んだとも言える。『諸法無諍三昧法門』に見られる『智度論』の教學さらに「法念處」の項における心識説などには北地の教學の影響があるのでないかと思われるが、さらに検討の必要がある。

16 安藤俊雄『天台学』（平樂寺書店・昭和四十三年）、五重玄義（四一頁）・四諦義（九七頁）・三諦（一一六頁）・十如（一二九頁）・三身説（一五九頁）・四土説（一六一頁）・性惡思想（一七一頁）・止觀（一七八・一八三頁）・二十五方便（二〇九頁）などの項目について、慧遠の教學の影響あるいは対比を論究されている。

17 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑・昭和三十六年・四一六頁）。

18 地論関係では菩提流支三藏（『法華玄義』巻十上、『四教義』巻一、『維摩玄疏』巻六、など）、光統律師慧光（『法華玄義』巻十上）などが引かれる。撰論関係では、真諦三藏（『法華玄義』巻四上、『維摩玄疏』巻五、など）の教學がしばしば引用される。三論関係では、三論師・中論師という呼称によつて批判する場面は多いが、撰山・興皇という用例（『四教義』巻一、『維摩經玄疏』巻六）がある。撰山とは僧誼、興皇とは法朗のことを指すのであろう。

19 『維摩經文疏』卷一（続藏影印本・二七・四三九左上）。

20 注18参照、また『法華玄義』卷二下に「陳世中論破立不同。或破古來二十三家明二諦義、自立二諦義。或破他竟、約四仮明二諦」、（大三十三・七〇二中）とある記事の中で、四仮に約

して二諦を明すのは興皇寺法朗であることを先に示した。『吉藏の教學と破邪の構造——唯識大乘義批判を中心として——』

「三 四重二諦説形成と唯識學批判」（駒沢大学大学院仏教学研究会年報・第四号・三四頁）参照。

21 『仁王般若經疏』卷上一（大三十三・三一四中）、智顥の五重玄義を引く。

22 『法華義疏』卷二（大正三四・四六六下）に智顥『法華經文句』（大正三四・一二六下）の一文を引く。『國清百錄』卷四に吉藏が智顥に法華經の開講を請う手紙が収録されている。なお智顥の『觀音玄義』の十雙と吉藏の『法華義疏』『法華玄論』との類似性について、佐藤博士は前掲書（四八一頁以下）で『觀音玄義』の著者を灌頂とし、彼が吉藏の著作を引用したものとされる。一方、安藤博士は前掲書（四〇〇頁）で吉藏『法華玄論』の一十雙は智顥の『維摩經文疏』によつていることから、『法華義疏』の十雙も智顥の『觀音玄義』によつたのであろうとされる。ちなみに、『法華義疏』の「顕禪師」の一文も『法華文句』からではなくて『維摩經文疏』卷五（続藏・二七・四六二右上下）の一文によつたとされる。

23 平井俊栄「嘉祥大師吉藏の基礎的研究——著作の前後関係をめぐつて——」（印度学仏教学研究・第十四卷・第二号・昭和

四十一年・一三六頁）参照。

24 『続高僧伝』卷七慧布伝（大正五〇・四八〇下）。

25 横超慧日訳『國訳法華義疏』（國訳一切經・和漢撰述・經疏部三）三六六頁註一五八。

26 平井俊栄「吉藏著『大般涅槃經疏』逸文の研究」（南都仏教第二十七号・第二十九号・昭和四十六年・四十七年）脚注。

27 桜部文鏡訳『國訳勝鬘寶窟』（國訳一切經・和漢撰述・經疏部十二）脚註。

28 続藏本『勝鬘義記』は上巻のみ。下巻はペリオ収集敦煌文書（一〇九一・三三〇八）に含まれていた。京都大学藤枝晃教授が将来され、東洋文庫収藏のもの。三三〇八番の文献は一乘章釈の一部であり、二〇九一番のものは、一乘章釈の末尾から最後までである。

29 宮本正尊「小乗數論の研究——天台嘉祥當時に於ける支那仏教の一問題」『大乗と小乗』（八雲書店・昭和十九年）所収・参考照。

30 拙稿「中國仏教におけるアビダルマ研究の系譜」（印度学仏教学研究・十九一一）「中國仏教における大乗と小乗」（駒沢大学仏教学部論集・第一号・昭和四十六年）付録参照。

31 伊藤隆寿「北魏及び梁代における仏教研究と成実」（駒沢大学院仏教学研究会年報・第六号・昭和四十七年）。

32 平井俊栄「北土三論師について」（昭和四十七年十月二十二日、第三十一回日本宗教学会発表）。

33 拙稿「北土智度論師について」（印度学仏教学研究・十七一

二・昭和四十四年) 参照。北地の智度論研究者の中で吉藏が人名を出しているのは北周の『二教論』の道安だけである。

34 注23・平井論文による。

35 『大乗玄論』は種々の面からの検討が必要であるが、特に「八不義」については伊藤隆寿「『大乗玄論』八不義の真偽問題」(印度学仏教学研究・十九一二・昭和四十六年)において、吉藏の真撰ではなく、慧均の作であろうとしている。「八不義」の中に「地撰成数等師」(大正四五・三〇上)といいう吉藏が普通は用いない呼称があり、後に見るようく、この呼称が慧均の常用のものであることも慧均作を支持する一つの論点となる。ちなみに吉藏のものとされている『弥勒經遊意』にも「地撰成毘諸家」(大正三八・二六八下)という呼称が見られる。

36 結城令聞「支那唯識学史上における楞伽師の地位」(支那仏教史学・一一一・昭和十二年)では、この地持師を楞伽師だとしておられるが、この呼称は他に類例がないので、断定できない。慧遠にも『地持論義記』があるし、玄奘三蔵による『瑜伽師地論』翻訳以前のこの時代に、『菩薩地持論』研究が盛んに行なわれていた事実に注目したい。

37 『法華統略』卷五(続藏經・四三・一・七九右下)。

38 『百論疏』卷中之中(大正四二・一七六中)、卷下之中(二九四下)。

39 『中觀論疏』卷一本(大正四二・七中)、卷六本(九三中)、卷七本(二〇四下)、卷八末(一二六下)。

40 『大漢和辞典』卷五(八七二頁中段)によると晩には日ぐれ

の意味とならんで、後(あと)の意がある。吉藏が『法華玄論』や『法華義疏』でよく用いる「晩見法華論」「晩見攝大乗論」などの晩見の用例も今のと同じ意味である。

41 伊藤隆寿「『大乗四論玄義』の構成と基本的立場」(駒沢大学仏教学部論集・第一号・昭和四十六年・一四三頁)。

42 『大乗四論玄義』卷十(続藏・七四・九八右上)に『大乗義章』「一乘義」(大正四四・六四八中)が引かれる。

43 『同右』卷十(同・一〇一右上)に「二種莊嚴義」(六四九下)が引かれる。

44 『四念處』卷一(大正四六・五六二上)、『四教義』卷三(大正四六・七三〇中下)。

45 『摩訶止觀』卷四下(大正四六・四六中)。

46 同・卷十下(二三七下)。

47 『中觀論疏』卷一末「所以然者、為三論未出以前。若毘曇成實有所得大乘及禪師律師行道苦節、如此之人皆是有所得生滅斷常、障中道正觀。」(大正四二・三一中)、初期の著作から有所得大乗という表現は多く用いられる。

48 注33・参照。

49 注30・参照。

50 『法華玄義』卷二下(大正三三・七〇四下)、『法華玄義釈籤』卷十八(同、九四二下)、『法華文句記』卷七中(大正三四・二八五上)。

51 山崎 宏『支那中世仏教の展開』(法藏館、昭和四十六年)

52 『続高僧伝』卷九慧藏伝（大正五〇・四九八中）に六大徳と
あり、卷十八曇遷伝（五七二下）には曇遷が慧遠慧藏僧休宝鎮
洪遵の五大徳と文帝に謁したとある。

53 注・14 参照。

54 『続高僧伝』卷十一吉藏伝によると、煬帝に従つて長安に行
つた吉藏が、三国論師といわれ、二十五衆第一摩訶衍匠であつ
た僧粲を議論で圧倒したことが述べられる（大正五〇・五一
四中、五〇〇下参照）。

55 宮本正尊「小乗教の形態と南方仏教」（『大乗と小乗』所収・
一三三〔頁〕）。